

国境を越えた少女マンガ

—台湾において日本のポピュラー文化はどのように受容されたのか—

CHAO I-Ting

本稿は台湾の親日的な行動や日本のポピュラー文化を消費する現象を問題とし、日本の少女マンガを通して異文化受容のあり方について考察したものである。台湾では見るものや聞くもの、さらに使うもの全てに日本の影がある。日本語を使う年配者や日本商品を消費する若者達など、彼らのこうした親日的な行為は台湾との日本の歴史的な関係と深く関わっている。日本と台湾は約五十年間の植民地時代、支配者と被支配者という関係であった。日本が撤退した後、台湾は中国から来た国民党が統治し、1990年代以降は現代化や民主化が進んだ。本来ならばかつての植民地支配者に関するものには抵抗があるのが一般的だが、台湾の場合はそうではなかった。日本文化は政府から人民に強制的に押し付けられたわけではないのに、人民に受け入れられている、あるいは求められているのである。また、植民地政権を経験していない民主化の時代に育った若者の日本に対するイメージは、彼らの親、そして祖父母から歴史の話を聞いたり、植民地時代に残されたもの(建築、制度や思想など)を通して形成された。

台湾が親日的であるのは、日本のポピュラー文化が積極的に台湾に輸入されていることにも顕著に現れている。たとえば1990年代後半には「哈日(ハーリー)」ブームがあり、日本のアニメ、マンガ、ドラマなどをはじめ、日本の商品やライフスタイルなどにも関心が高まった。特に、1990年代には、能動的に日本ポピュラー文化に接触する「哈日族」が、マンガ、ドラマなどのメディアコンテンツだけではなく、その中に描かれた日本人のファッションやライフスタイルにも注目することとなった。このブームの火付け役は、読者の日常生活と密着した日本の少女マンガであると考えられる。そこで本稿は少女マンガを主な素材としながら、異文化受容について考察した。日本の少女マンガは読者達に何を提示し、どのような日本へのイメージを形成しているのかについて考察し、異文化受容のあり方を提示する。

日本のポピュラー文化が台湾で受容された要因として、かつての植民地支配者に解放後も

文化的に従属する文化帝国主義や、コンテンツを使って文化を発信するソフトパワー論といった観点からの議論が従来はなされてきた。しかし、哈日ブーム以前から台湾では日本文化に接触、あるいは消費する行為が存在した。また、日本文化は国民党政権時代に禁止されていたにも関わらず、人民は能動的に日本文化を求めていた。

台湾における日本のポピュラー文化の受容については、日本統治期と国民党政権期といった歴史的な文脈と、1990年代以降の台湾の政治の自由化、経済発展、さらには受け手である台湾人民の視点から考察しなければならない。台湾人が日本文化を広く、好意的に受け入れられたのは、文化的な近さという側面がある。確かにアメリカ文化と比べれば、台湾文化と日本文化は比較的に近いとは言えるが、この点についても、受け手の歴史的な文脈や文化の内部について考慮しなければならない。

具体的には、第2章で台湾における日本のポピュラー文化の浸透を歴史的な文脈から考察した。日本による植民地統治の経験者に対するインタビュー調査を用い、植民地時代から国民党政権時代に形成された日本へのイメージを考察した。また、国民党政権期に行われた文化政策が日本文化の発展にどのような影響を与えているのについて明らかにした。

第3章では、日本のマンガとトレンドドラマを取り上げ、印刷物と映像商品が受け手にどのようなイメージや影響を与えているのかについて考察した。日本のマンガを閲覧する台湾の学生を対象とし、彼らの日本のマンガの閲覧習慣や受容についてアンケート調査を行った。これは1999年の辛による調査に基づいて行った追跡調査である。哈日ブームであった1999年の調査と著者が2016年に行った調査と比較しながら、読者の日本マンガの受容を考察した。

第4章は日本の少女マンガの受容を知るため、台湾の読者にインタビュー調査を行い、日本の少女マンガからどのような日本へのイメージが形成されているのかについて考察した。また、少女マンガとかわいい文化の発展との関係について考察し、他のポピュラー文化とは異なった機能を少女マンガが提示していることを明らかにした。